二〇一一年五月一四日

潮風にのりて海行く夏の蝶　よし女
右左お尻を振りて草刈機　こすもす
ぶな林の涼しまだらの木漏れ日に　ともえ
キッチンの窓にさ揺らぐ若葉影　きづな
天を突くメタセコイアの芽吹きかな　満天
保育園四方に代田のひろがりて　なつき
草いきれまき散らしをる草刈機　はく子
蜑の道浜豌豆の花盛り　よし女
水嵩の増したる川面つばくらめ　せいじ

二〇一一年五月一三日

散り際を潔く剪る牡丹守　有香
鐘楼を包むがごとき緑樹かな　わかば
門川に鯉遊びをる涼しさよ　はく子
哲学の道は貸し切り余花の雨　きづな
これ以上の青空はなし鯉幟　よし子
水明に青葉若葉の南禅寺　菜々
太陽の塔の顔にも黄砂ふる　小袖
雨意兆す空に牡丹の愁ひあり　満天

二〇一一年五月一二日

葉桜の舗道を濡らす小糠雨　つくし
新緑に風も色づくかと思ふ　宏虎
就中際立つ無垢の白牡丹　うつぎ
人気なき哲学の道花は葉に　ぽんこ
間遠なる読経の声や若葉雨　わかば
風に揺れ谷へなだるる濃山吹　とろうち
青時雨大和三山滲ませて　明日香
筋塀に疎水高鳴る路地涼し　菜々

二〇一一年五月一一日

一村を湖底に沈め峪若葉　花茗荷
棚藤を揺らしゆきしは千の風　かれん
植木屋の一服長し囀れる　とろうち
大いなる神の石抱き山笑ふ　明日香
デパートのウインドウはや夏本番　雅流
神宿る飛鳥の奇岩木下闇　明日香
大き泡吐きて浅利の小さきこと　なつき
一花一花覗きて雨の牡丹守　うつぎ
地下街を出でて眩しき新樹光　宏虎
お不動の先客まるは青毛虫　よし女
修験者の法螺万緑に響きけり　わかば

二〇一一年五月一〇日

新茶摘む音小気味よきリズムかな　小袖
改札口白を吐き出し夏来る　菜々
わがグルメ白きとろろに麦の飯　ぽんこ
よろこんで腹を見せゐる鯉のぼり　とろうち
躑躅燃ゆ庭へ全開大広間　満天
カーナビの案内怪しき木下闇　きづな
さざ波の韋駄天走る植田かな　こすもす
筍の鍬いれどころ合点す　よう子
明日植ゑむ苗箱畦に代田澄む　雅流
新緑を浴びて活力賜りぬ　宏虎
立杭の窯の寝姿風薫る　ともえ
ここにある蔵元館竹の秋　なつき
涙目をして伐られゐる袋角　宏虎
筍の切っ先リュックはみ出しぬ　有香
杉の秀のかかる高きに天つ藤　明日香
身じろがず葉裏に眠る蝸牛　あさこ
万緑や七堂伽藍鎮もりて　わかば

二〇一一年五月九日

襖絵は枯山水や堂涼し　満天
朴若葉三角点を目指す道　雅流
大甕に贅といふほど濃山吹　とろうち

万事休筍の先剥きすぎて　ともえ
大神輿踏切一気とはゆかず　よし子
子らは皆道草が好き葱坊主　はく子
ギヤマンのレトロな器冷奴　花茗荷
回廊はうぐひす張りや若葉風　満天
廃校となりし校庭つつじ燃ゆ　きづな
立杭の土器薫風に乾きをり　小袖
道外れここは蛙の国ならむ　うつぎ
汲み置きの水並びをる金魚店　なつき
さざ波の代田に夕日落ちんとす　有香
御手洗に猫横たわる薄暑かな　ぽんこ
交番の灯ともりどきや夕蛙　うつぎ
竹の秋墓地の開発なほ奥へ　きづな
山裾に遊ぶ風あり竹の秋　雅流
囀りやモールス符号めくは何　よし女
新緑の園に総玻璃レストラン　宏虎
異種新種華麗を競ふ薔薇の園　明日香
風やめばちょっと一息鯉幟　こすもす
山々の襞際やかに夏立ちぬ　はく子

二〇一一年五月八日

薪能果てても火照りさめやらず　宏虎
母の日のうれし祖母にはなれずとも　明日香
天つ藤原生林の天辺に　わかば
豆の花貸農園のあちこちに　菜々
苗代茱萸あらば摘まんで棚田道　うつぎ
里若葉単線電車折り返す　雅流
薫風や橋脚潜る櫂捌き　花茗荷
つつじ燃ゆ丘の上に海展けけり　ぽんこ
新樹燃ゆ山並み幾重にもつづき　治男
早苗田や衛士さながらに立つは鷺　せいじ
万緑や薪堆く陶の郷　ともえ
緑映ゆ伏見の清水手に掬ふ　うつぎ
隧道を出でて仰げば懸り藤　かれん
苑涼し日の斑の揺らぐ石畳　わかば
訪ひくれば一面著莪や奥の院　こすもす
祭りの子お守り袋腹掛けに　なつき

毎日句会みのる選・二〇一一年八月二日